

2014年5月24日 A-1 研究会

- ① 脳という大量の神経ネットワークでできた生理的物質から、いかにして意識（心）といった人間に固有の現象が出てくるのか。心脳問題は現代の科学、医学、心理学などの諸科学と哲学を巻き込んだ大問題であり、さらには人間の宗教意識の根源とその意味を知る上でも避けて通れない問題である。ただし諸科学の境界領域を超えなければ解明できない分野なので、同時に科学の方法、限界をめぐっての議論も並行的に進むことになる。5月24日第1回目のテンプルトン研究会としてはふさわしい白熱の議論が展開された。浅野孝雄氏によるフリーマン理論の紹介と解説、保江邦夫氏による量子場脳理論の紹介と解説。どちらの理論も単独のニューロンの働きよりも集団運動、特に非線形ダイナミックスに着目する。量子場脳理論は物理システムとして脳をとらえる、フリーマン理論はニューラルネットワークとして脳をとらえる、それぞれの方法論には違いがあるが、意識（心）とは何かについての科学の側からの一つの解釈を提起した。特別に科学的知識に詳しくなくても、波動やカオス的アトラクターの集合という発想には、モノではなくコト的な意味が読み取りやすいのではないだろうか。ここで解釈学的アプローチは大いに参考になる。

今後、志向性の概念の拡張によって、科学言語と自然言語の双方を通して脳から心が創発するメカニズムと心の表現や認知機構と結び付けつつ、周囲環境との相互作用の中で幸福な社会形成の意味の探究につなげていきたい（稲垣久和）。

- ② 7月19日、9月6日（？）のミニ研究会では、人間脳の生物学的な側面と心の持つ理性や情動の側面とからんだ「欲求」「欲望」の関係を議論した。「のどが渇いて水が飲みたい」という先天的な生理的な欲望であれば水を飲めば終わりであるが、現代の「金を儲けたい」という欲望は明らかに後天的であるだけでなく、近代の市場主義の発達で止めどもなく増幅している。なぜそういう事態になるのか。フリーマンの脳理論やパンクセップの脳の情動理論からはこの「欲望」についてどのようなことが言えるのか、また「金を儲けたい」という欲望を是認し増長させる新古典派経済学のアホ・エコノミクスが持つ前提の問題点とその克服、これらについて討論した。脳科学の側面の発題を浅野孝雄氏が、経済学の問題点を石戸光氏が発題した。

浅野孝雄著『心の発見』（2014年）への稲垣久和よりの質問

245 カール・ポパーの世界3の解釈は？

229 フリーマン理論は実在論に立脚した認識論的独我論というのが実在論と独我論は対立するのではないか？

269 「理性が煩悩を制御できる」と理性の優位があり、他方で、来世で得られる利益を「後世利益」（261）とするが、死後の世界を理性的に考えるのは矛盾ではないのか？

320 『阿含経・長部』に記されている「四無量心」、『法句経』に記された「七仏通戒喝」、また『スッタニパータ』に記されている、「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ」という単純直截なブッダの言葉は、いかなる教理よりも強く我々の心を打ち、己の汚れた心を振り棄てて清浄な心を強めたいという欲求を生じさせる」。⇒浅野氏の信仰心の表明か？

321－322 「法爾」という観念は、・・・そのメカニズムをフリーマン理論に基づいて理解することができることを、すでに我々は知っている。煩悩のメカニズムもパンクセップ理論で十分に説明することができる。それと同様に唯識自体では説明不可能とされる「智の因」についても、合理的・科学的な説明が可能なのではないだろうか？⇒進化心理学における「生得的利他心」がそれだということなのか？

340 世界4の承認？ 世界4は有神論の伝統と無神論の伝統の両方を含んでいるが、
「251 梵我一如と“インマヌエルの現実実”の関係」「251 インスピレーションと神が息を吹き込むこと」なども世界4の承認のように思えるが。

世界4とは主体がスピリチュアルな意味の世界を世界1－3との整合性の中でリアルであると認識することである（稲垣『実践の公共哲学』春秋社、216頁）。スピリチュアルな意味とは志向性が世界内存在ではなく世界内超越の中に開かれていることを承認していることである。フリーマンの志向性は世界内存在であるとされているようであるがこれには疑問がある。なぜならフリーマンの脳カオス理論がトマス・アクイナスから志向性を継承するときに「アリストテレスの **active perception** (能動的知覚) を意志と志向に区別した」（『脳はいかにして心を創るのか』34頁）と言うのだが、しかしここでトマスは「志向とは本来、意志の働きである」（トマス『神学大全』第9冊第十二問題）とはっきり語っているからだ。トマスにおいて意志と志向性はそれほど明確に区別されていない。その理由はトマスの体系が本来、有神論つまり「神の意志の中での被創物としての動物と人間」であることが前提となっているからである。神の霊が動物と人間を生かしている、というのは前提であり、志向性が **voluntary** (自発的) であるのは神の **voluntas** (意志) から来ていることを思えば納得できる。これは脳科学の場面にシフトさせた時もそのまま言える。したがってフリーマンが自分の実験結果を解釈するためにトマスの志向性を継承したのは卓見であったが、もともとその志向性は世界内超越に開かれた形で解釈されるべきなのである。そしてこの解釈は脳内のカオス・アトラクターの軌道や形の変化がエネルギーではなく“情報”のみによる（J・ポーキングホーン）という物理学的事実と整合的である。